

ヤン・トゥーレ
Yann TOURET

〔Maison Wabi-Sabi代表（フランス・パリ）〕

日本語訳：萩 慶子

最終回は、フランスの陶芸の現状と今後の展望について。

フランスの地で、

日本のやきものをめぐる息の長い構想を形に—

メゾンワビ-サビ

M a i s o n W a b i - S a b i の 思 い

第4回・最終回



フランスの
陶芸事情

フランスの陶芸家は
どこで制作しているのか？

二〇二六年現在、フランスにおける陶芸家の分布は、国内全域に均等に広がっているわけではありません。彼らの活動は、歴史的に陶芸文化が育まれてきたいくつかの主要な地域に集中しており、そこでは工房や教育機関、陶芸フェア、さらに作り手同士を結ぶネットワークが活発に機能しています。フランスで陶芸家の活動拠点として広く知られている地域は、いくつかの地が挙げられますが、日本でも、日本六古窯をはじめとする窯業地や、東海・中国地方・九州といった、歴史ある陶芸産地が存在するのと同様に、フランスにも陶工や陶芸家が数多く集まり、地域特有の陶芸文化を育んできた拠点が各地に存在するのです。

ここでは、フランスにおける代表的な陶芸の産地を七カ所紹介したいと思います。

ています。

④サントル・ヴァル・ド・ロワール地方 Centre-Val de Loire（フランス中部）

主要地：ラ・ボルヌ La Borne

この小さな集落には、ごく限られた範囲に約八十名の陶工・陶芸家が工房を構えて、ヨーロッパでも屈指の陶芸村として知られています。陶磁器で有名なジアンジャンもこの地方です。

⑤ヌーヴェル・アキテーヌ地方 Nouvelle-Aquitaine（フランス南西部）

主要地：ラ・シャペル・デ・ポ

Chapelle-des-Pots、リモージュ

Limoges、リマイユ Limeuil

リモージュ磁器の伝統によって今日もなおフランス有数の陶磁器産地として高い評価を受けており、また古くからの技術と伝統を受け継ぐ陶芸の村々

く地域。ここでは毎年数多くの陶器フェアが開催され、フランス各地から陶工や陶芸家が集い、それぞれの作品や技法を紹介する場となっています。作り手同士の交流を図るとともに、一般の人々が現代陶芸に触れる貴重な機会としても重要な役割を担っています。

③プロヴァンス・アルプ・コート・ダジュール地方 Provence-Alpes-Côte d'Azur（フランス南部）

主要地：オーバーニュ Aubagne、

ムスティエ・サント・マリー

Moustiers-Sainte-Marie、ブアロ

リス Vallauris

とりわけプロヴァンス地方には、テラコッタ、ファイアンス、装飾陶芸を専門とする工房が数多く点在し、その数は数百に及びます。現在もなお、多様な技法と地域に根差した陶芸文化が受け継がれており、フランスを代表する陶芸の一大産地として高い評価を得

①オーヴェルニュ・ローヌ・アルプ地方 Auvergne-Rhône-Alpes（フランス南東部）

主要地：サン・ユズ Saint-Yuz、

デュルフィ Dieulefit、ルズー

Lezoux、クリウスクリュ Clusclat

とりわけドローーム県 Drôme は、多数の独立工房が集まる地域として名高く、年間を通じて陶芸講座やワークショップが数多く開催されるなど、創作と学びの場として活発な活動が展開されています。

②オクシタニー地方 Occitanie（フランス南部）

主要地：サン・カンタン・ラ・ポ

テリ Saint-Quentin-la-Poterie、

アンドウーズ Anduze、ロー

ゼルト Lauzerte、ジルッサン

Girousens

手仕事による陶芸文化が色濃く息づ

が各地に点在しています。地域に根差したもののづくりの文化が現在まで脈々と継承されていることも、この地域の大きな特徴です。

⑥グラン・テスト地方Grand Est (フランス東部)

主要地：スフレンハイム

Soufflenheim、ベッシェドルフ

Betschdorf

両村はいずれも数世紀にわたって陶器づくりの伝統を受け継いできた歴史ある産地であり、現在もアルザス地方の陶芸文化を象徴する存在として高く評価されています。受け継がれてきた技術と地域固有の様式は今なお息づき、フランスを代表する伝統陶芸の一つとして重要な役割を果たしています。

⑦ブルターニュ地方Bretagne (フランス北西部)

主要地：カンペールQuimper、サ

陶芸がキャリアチェンジの受け皿としても注目を集めるようになりました。マーケティング、デザイン、小売業など、さまざまな分野から陶芸の世界へ転身する人々が増えています。フランス国内の陶工・陶芸家に限定した公的な統計が存在しないのは、彼らが職人、芸術家、個人事業者など様々な立場で活動しているためです。現在、最も信頼性が高いとされる推計によれば、フランス国内には約四千〜六千軒のプロフェッショナルな陶芸工房（日常の器から陶彫・オブジェ陶など）が存在し、この分野を主たる生業とする制作者は約六千〜八千人にのぼるとされています。

さらに、タイル・水回り磁器・衛生陶器・工業陶器などの分野まで含めると、フランスのセラミック産業全体では約一万八千人の雇用を支える一大産業となっています。これは陶芸が単なる工芸だけの領域にとどまらず、建築

ルゾー Sarzeau

ブルターニュ各地で開催される陶芸フェアには、毎年数十名に及ぶ陶工・陶芸家が出展し、年々多くの来場者を集めています。こうした催しは、作り手と使い手を結ぶ交流の場であるとともに、地域の陶芸文化を広く発信する重要な機会となっていると感じます。

もしも陶芸家の工房を訪ねたり、あるいは整った環境の中で自ら工房を構えることを考えるのであれば、デュルフィ Dieulefit、ラ・ボルヌ La Borne、サン・カンタン・ラ・ポトリール Saint-Quentin-la-Poterie、オーバーニュ Aubagne、ピカンも作陶したヴァロリス Vallauris などは、今日においてもフランスを代表する陶芸の拠点として広く認識されており、お勧めします。

これらの地域には多くの作り手が集まり、工房、教育機関、陶芸フェア、さらには作家同士の交流や協働を支え

資材、生活インフラ、工業技術など多岐にわたる分野と結びつき、フランス社会の中で広範な経済的・文化的基盤を形成していることを示しています。

フランス全国陶芸家連合 (Collectif National des Céramistes) は、毎年、国内で開催される陶芸フェアを網羅したPDF一覧を公式ウェブサイトで公開しています。二〇二六年には、一六〇を超えるフェアの開催が予定され、フランス現代陶芸の豊かな創造性と手仕事の力を広く一般に紹介しています。

そこから見えてくるのは、地域レベルにおいて、手仕事による陶芸は今なお多くの作り手や愛好家によって支えられているということ。一方で全国的な視点に立つと、その豊かな文化的価値や魅力は、いまだ限られた人々にしか十分に知られていないという現実があります。地域に根付いた活発な創作活動と、広く社会へ届けるための認知との間にある隔たりこそが、現在のフ

るネットワークなどの陶芸インフラが整っており、フランスの現代陶芸を牽引する重要な制作拠点となっています。

フランス人陶芸家の活動って？

日本では現在でも陶芸家という職業は男性が多数を占めていますが、フランスの陶芸界は近年、大きく様相を変えつつあります。二〇二六年現在、その新たな潮流を担っているのは、主として女性陶芸家たちです。

もちろん、四十年、五十年にわたり制作を続けてきたベテランの陶芸家たちは、今なお各地で精力的に活動を続けています。しかしその一方で、フランスの陶芸界には新しい価値観と多様な表現が生まれています。異業種から陶芸家へ転身する人々も増え、その多くを女性が占めるなど、新たな担い手の存在が注目されています。

また、この10年ほど、フランスでは

ランス陶芸が向き合う大きな課題のひとつといえるでしょう。

こうした陶芸文化を支えているのは、何よりも人と人との出会いであると言えます。作り手同士の交流はもちろん、口コミによる紹介や、各地で開催される数多くの陶芸フェア、陶芸家団体によるさまざまな活動は、フランスの手仕事による陶芸の魅力を広く伝え、新たな出会いへとつなげる重要な役割を果たしています。作品を通じて人がつながり、技術や感性が磨かれ受け継がれていくこそが、フランスの陶芸文化を今日まで育んできた大きな原動力となっているのです。

フランス現代陶芸

―私が注目する作家たち―

私がよく知る四名のフランス人陶芸家を紹介したいと思います。フランスを代表する「最高の陶芸家」を選び出すとするのではなく、私が自ら接

し、その創作の歩みや陶芸に対する姿勢に深く共感する陶芸家たちを通して、現代フランス陶芸の一つの姿を知っていただきたいのです。この選定はあくまでも私自身の視点に基づくものです。二つの大きな方向性が見られると考えるようになりました。

技術の完成度を追求する陶芸

―卓越した技術と

造形の精度を重視

この系譜に属する陶芸家たちは、ろくろ成形、手捻りや塑造のいずれにおいても高度な技術を持っています。釉薬や加飾の施し方にも緻密な計画性と確かな技術が貫かれ、一つひとつの工程に確固たる熟練が感じられます。

また、陶土や釉薬は専門業者から調

の美しさを静かに映し出しています。二〇二五年より、東京・日本橋のギャラリー凜空において作品を発表しています。

グレゴワール・ルメール

独学で陶芸を学び、鉱物の風景や岩肌、そして土そのものが宿す美しさから深い着想を得ています。

フランス中部ロワレ県に工房を構え、十年以上にわたるろくろ成形、彫刻的な加飾、そして釉薬表現を融合させつつ、自然が生み出す多彩なテクスチャーを作品へと昇華してきました。その制作は、ラ・ボルネ La Borne の陶芸文化を受け継ぐ系譜の中に位置づけられ、伝統を踏まえながら独自の表現を切り拓いています。

造形作品から日常の器まで、土という素材が持つ多様な魅力や可能性が十分に生かされており、高い技術力、繊細な感覚、そして素材への深い探究心が一体となって表現されています。



グレゴワール・ルメール
Grégoire LEMAIRE



サラ・モヴィリイ
Sara MAUVILLY



達し、焼成には電気窯やガス窯を主に用いています。技術管理を徹底することで、安定した品質で制作することができるのです。

サラ・モヴィリイ

日本の美意識と、土と釉薬が織りなす豊かな表情に深く影響を受けながら制作している作家です。

ファッション・ラグジュアリー業界 (Louis Vuitton) でのキャリアを経て、二〇二〇年にはパリ近郊に自身の工房 [Argile124] を設立し、本格的に陶芸の道へと進みました。現在は、炆器と磁器を用いた一点物、および制作数を限定した作品を中心に制作しています。ゼーゲル方式による釉薬の調合を公式化した Montmolin 氏の技法を用い、高火度焼成のためのオリジナル釉薬の研究・開発にも取り組んでいます。

その作品は、簡潔で端正な造形のなかに自然や四季の移ろいを釉薬で表現し、日々の暮らしに寄り添う器

土と炎が導く陶芸

素材への探究と、火が生み出す偶然を受け入れる

この系譜に属する陶芸家たちは、天然の陶土や灰、鉱物などの素材を探究することを、制作そのものの重要なプロセスと捉えています。彼らは陶土や釉薬の原料を自ら採取するために採石場や河川、畑、海岸を訪れ、時には地元漁師や職人たちの協力を得ながら、土地に根差した素材を集めています。原材料を求める工程は単なる制作準備ではなく、土や自然環境と向き合い、その土地の風土を作品へと取り込むための制作の一部であり、彼らの陶芸理念を支える基盤となっています。

成形は、ろくろによるものから手捻りまで、多様な技法を用います。焼成には薪窯を使い、蜂の巣窯や穴窯・トレンキンルンなど、それぞれの窯の特性を生かした焼成を行います。窯焚きは数十時間から数日に及ぶ場合もあり、

炎の流れや灰の積もり、窯内の微妙な環境変化を受け止めながら、土と火が織りなす予測不能な表情を作品に託していくのです。炎は窯の中で一つひとつの作品に異なる表情を与え、作り手の意図を超えた変化をもたらします。予測できない働きを受け入れることこそが、彼らの陶芸観の根幹を成しているのでしょう。

彼らの工房は多くの場合、薪窯で長時間の焼成を行える農村部や自然豊かな地域に構えられています。それを許容する地域条件は、彼らの制作活動を支える重要な基盤となっています。

クレール・ランデス・ソヴァージュ

自然とその諸要素との親密な対話を創作の根幹に据え制作しています。

イタリアで美術を学び、その後ストラスブルで研鑽を積んだ彼女は、各地で自ら採取した自然の土を用い、手捻りによる制作を続けています。その器は薪窯で焼成され、炎が刻み込む灰

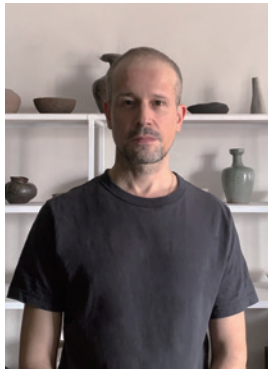
の探究、高度な技術、そして素材への繊細な感性を融合させた独自の制作を展開しています。

作品には、削ぎ落とされた洗練「簡素の美」、作り手の所作が宿る造形、時代を超えて受け継がれる陶芸の普遍的な美しさへの深いまなざしが貫かれています。

シン・フランス陶芸

他の多くの創作分野と同様に、陶芸の世界にも時代ごとの流行が存在します。

近年では、あえて荒々しく指跡を残した手捻りの作品や、意図的に未完成さを感じさせる造形、灰釉を用いた作品、さらには実験的な表現を前面に押し出した前衛的な陶芸も数多く見られるようになりました。こうした作品は、その制作意図や表現の背景を知らなければ、初見では理解が難しい場合も少なくありません。



ロミュアルド・モレル
Romuald MAUREL



クレール・ランデス・ソヴァージュ
Claire LANDAIS SAUVAGE



被りや窯変、土肌の質感をそのまま受け止めながら、一点ごとに異なる豊かな表情を生み出しているのです。

日本の陶芸文化にも深い敬意を寄せる彼女の作品は、素材そのものもつ力と素朴な美しさを大切にし、土と火、そして時間が織り成す対話を静かに映し出しています。そこには原始的でありながら詩情に満ちた世界観が息づき、観る者を深い静寂へと誘います。

二〇二四年には、京都・祇王寺のギャラリーにて作品を発表しました。

ロミュアルド・モレル

とりわけ日本をはじめとするアジアの陶芸文化に深い敬意を抱き、その伝統に学びながら制作を続けています。

ポルドー国立美術学校で学んだ後、アートディレクターとして活動した経歴を持ち、その後、陶芸制作と古陶・現代陶芸の炆器研究に本格的に取り組むようになります。熱心な陶芸コレクターとしても知られる彼は、美意識へ

しかし、このような多様な試みもまた、現代フランス陶芸の豊かな創造性を示す一つの側面であり、素材や技法、造形の可能性を絶えず問い直そうとする作家たちの探究心の表れといえるでしょう。新しい世代の陶芸家たちが生み出す作品は、より造形性が高く、色彩豊かで、繊細かつ装飾性に富んだ表現が数多く見られます。

その多くは美術学校（大学や専門学校）で陶芸を専門的に学んだ陶芸家であり、彼らは確かな造形教育を背景に制作を行っています。一方で、作家としての独自の表現や美意識は、まだ発展の途上にある場合も少なくありません。そのため、陶芸フェアや一部のギャラリーでは、造形や色彩感覚、作品の雰囲気が見通った作風が見受けられることもあります。これは創作活動の成長過程における自然な現象であり、それぞれの陶芸家が経験を重ねるなかで、自らの表現を少しずつ確立し

ていくものといえるでしょう。

なかには、SNS、とりわけ Instagram での「映え」を強く意識した作品づくりを行う陶芸家も少なくありません。時として作品そのもののより「イメージ」が前面に出すぎてしまい、技術的な探究や造形への思索、あるいは釉薬表現への取り組みが退いているように感じられることもあります。こうした作品は、ライフスタイル誌などのメディアで大きく取り上げられ、多くの注目を集めることも少なくありませんが、その一方で、この流れがフランスの手仕事による陶芸の価値を長期的な視点から高めることにつながるのかについては、慎重に見極める必要があると考えています。

また、やや憂慮すべき動きも見受けられます。極端に低価格で販売される作品や完成度に問題のある器、つまり本来であれば陶芸フェアに出すべきではないような作品が、「アトリエ・

セール」の名のもとに、在庫処分的に販売される例も少なくありません。

このような流れは、陶芸家という職業の社会的評価や、手仕事による陶芸の本来の価値を高めることにつながっているとは思えません。むしろ、一点一点に込められた技術や時間、経験への理解を曖昧にしてしまう危うさも含んでいるように感じられるからです。

そのような中にも、フランスの陶芸界において確かな評価と知名度を築き、流行に左右されることなく、着実に創作活動を積み重ねてきた作家たちも存在します。そうした人々は、自らの表現をひたむきに磨き続けながら長期的な視点で制作し、フランス現代陶芸を支える重要な存在となっています。

手仕事による陶芸への高まりが、今後フランスでどのようなカタチで定着していくのか、私は大きな関心を寄せて見守っています。

終わりに

「せっかくの伝統や技術も愛好家を育てなければ廃れてしまう」これは常々思うことです。

手仕事による陶芸が培ってきた豊かな世界——日本各地の窯元や工房の多様性、地域ごとに受け継がれてきた陶芸文化、それらを支え続ける一人ひとりの陶芸家の存在については、いまだ十分に知られているとはいえません。

私は、この日本の陶芸界を支える、陶芸家の存在と技術・日本の陶芸文化のストーリーを展示会を通して伝え、「うつわ」を見る目を育んでもらい、手に取ってもらうことが、Maison Wabi-Sabi の使命であると考えています。

四回にわたる文章をお読みくださった皆様に、心より御礼申し上げます。

Merci Beaucoup!